

# ICT を活用した読書感想文作成支援プログラムの実践 Implementation of an ICT-Based Learning Program for Writing Book Reports

高橋 麻衣子<sup>†</sup>  
Maiko Takahashii

<sup>†</sup> 早稲田大学  
Waseda University  
maiko\_tk@aoni.waseda.jp

## 概要

読書感想文の作成にかかわる心的活動を「読む」「思考する」「書く」のフェーズに分解し、各フェーズを ICT の機能によって支援するプログラムを小中学生に対して実施した。プログラムの結果、参加者の読書感想文作成の、特に「書く（作文）」活動についての効力感が上昇した。「読む」「書く」を代替、補助するタブレット端末の機能は参加者に取り入れられやすかったのに対し、「思考する」を支援するマインドマップや生成 AI の機能の活用は慎重である様子がみられた。

キーワード：読書感想文，ICT 活用，学習支援

## 1. 問題と目的

インクルーシブ教育システムの構築が推進され[1]，多様な教育的ニーズを持つ学習者がともに学ぶ環境の整備が喫緊の課題となっている。近年，通常学級の中には担任教員からみて，知的発達に遅れはないものの学習面または行動面に著しい困難を示す児童生徒が 8.8%，学習面のみに著しい困難を示す児童生徒が 6.5% いることが報告されたエラー！参照元が見つかりません。このような学習者にとって，ICT は情報の入出力の手段を増やす強力なツールとなる。GIGA スクール構想によって配布された一人一台のタブレット端末を活用すると，自力での読み書きに困難を持つ学習者も，文章についての読み上げ音声の提示によって文章内容にアクセスし，タイピングや音声入力によって文章作成が可能となる。ICT が学習者の読み書き機能を代替することとなる。

本研究は，ICT による読み書きの機能代替の効果について読書感想文作成支援プログラムの実施によって検討することを大きな目的としている。学校現場で課されることの多い読書感想文の作成は，特に読み書きに困り感を抱える学習者に忌避される課題の一つである。読書感想文作成のために，本を読み，書くべきアイデア（感想）を生成し，文書を書くという活動を実施する必要があるが，これらの活動の中で，読むことと書くことは ICT 活用による機能代替が可能である。ICT の活用

によって読み書きを代替することで情報の入出力にかかわる「読み」「書き」へ配分すべきリソースを「理解・思考」「感想」のフェーズへ割り当てることができる。これによって，学習者の読書感想文作成への心的障壁が小さくなることが予想される。

本研究では，読み書きに苦手意識を持つ学習者を含む小・中学生を対象にタブレット端末を活用した読書感想文の作成プログラムを実施し，学習者の読書作文作成についてのスキルや態度にどのような影響を及ぼすのかを検証し，ICT 活用による機能代替が学習全体に及ぼす効果を検討することを目的とする。読書感想文の作成は，「読み」「書き」の手段を代替するだけでは難しく，文章作成のためのアイデア生成を支援する必要もある。本実践では，読み書きにかかわるタブレット端末の機能だけでなく，アイデア生成を支援するポストイット，マインドマップ，さらには生成 AI 活用の紹介を行った。

## 2. 方法

### 参加者

東京都内の公立小・中学校に通う児童・生徒 14 名（小学 4 年生 5 名，5 年生 2 名，6 年生 5 名，中学 1 年生 2 名）。読み書きに苦手意識がある学習者を募集したが，書き障害の診断を持つ児童（小 5）が 1 人いるのみでその他の児童・生徒からは特筆した苦手感は報告されなかった。

### 活動スケジュール

1 回につき 1 時間 30 分のプログラムを 1 週間おきに 4 回実施した。各回の学習概要を表 1 に示す。

表 1 プログラムスケジュール

	テーマ・内容	参加者の活動
1	導入：読書感想文を書く過程とはどのようなものか	・数種類の飲み物を飲んで味についての感想を発表しあう

	「感想」をもつとは	
2	タブレット端末を使って「読む」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文章内容の動画を見る</li> <li>・文章をデジタル化し、読み上げ音声を聞く</li> </ul>
3	タブレット端末を使って「書く」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マインドマップ、付箋を使って思考を整理する</li> <li>・音声入力を活用する</li> <li>・タイピングを活用する</li> </ul>
4	ふりかえり:読書感想文の作成にテクノロジーはどのように活用できるか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各自のアイデアの共有</li> <li>・ChatGPT に読書感想文を書かせてみる</li> </ul>

### 3. プログラムの様子

1回目では、導入時に「読書感想文」を「読書」「感想」「文」に分解して参加者に示し(図1)、「読書」と「文(を書く)」の活動はタブレット端末で実施できることを説明した。また、感想を生成する題材は本の内容だけでなくともよいことを伝えるために、各自にさまざまな飲み物を飲んでもらい、その感想を自分の言葉で、他の人と重複のないように生成する活動を行なった。

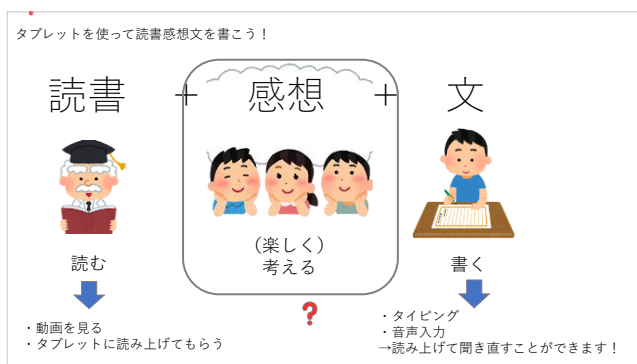


図1 プログラムで提示したスライド例

2回目では、情報入力の手段は「読む」だけではないことを示し、「聞く」ためのテクノロジーを紹介した。動画を視聴したり、文章をタブレット端末に読み上げさせたりするやり方を教示し、それぞれの好みのやり方で芥川龍之介「蜘蛛の糸」を読む活動を実施した。

3回目では、「書く」を代替するテクノロジーとして、タイピングや音声入力を紹介した。また、自分の頭に浮かんだことを外化することで感想がふくらんでいくことを伝え、ポストイット(付箋)にアイデアを書く活動、さらにはマインドマップアプリの活用方法を紹介し、

好きな方法でアイデア生成するように伝えた。

4回目では、各自が作成したポストイット、マインドマップでのアイデアの広がり共有した。最後にプログラム全体をふりかえり、「読書」と「文(を書く)」の活動はテクノロジーにやってもらえるが、「感想(考える)」はどうだろうか」と投げかけ、AI(人工知能)としてChatGPT3.5の紹介をした。AIと人間のどちらがよい感想文をかけるのかを調べるために、参加者が取り組んだ「蜘蛛の糸」の読書感想文課題をChatGPTに入力した結果、参加者からは「文章はうまいけど内容がちがう」等の声があがり、「AIも間違えることがある」「読書感想文は自分の経験や感想と結び付けなくてはいけない」などの教訓が引き出された。

### 4. 結果と考察

本プログラムの前後に同じ題材で読書感想文を書く時間を設定し、読書感想文に対する参加者の気持ちをアンケートによって尋ねた。プログラム前に参加者が作成した読書感想文の平均文字数は178.62字、プログラム後は平均294.62字となり、プログラムの受講によって文字数が有意に増加していた( $t(13)=2.43, p<.05$ )。内容に対して書くべきアイデアが増加したことが考えられる。ただし、3週間の間隔をあけているとはいえ、同じ題材についての感想文作成であるため、練習効果も考慮に入れる必要がある。

また、読書感想文作成時の気持ちについて、図2の項目について「とてもそう思う(4点)」、「まあそう思う(3点)」、「あまりそう思わない(2点)」、「まったくそう思わない(1点)」で評定してもらい、プログラム前後の得点を比較した(図2)。t検定の結果、「本を読んでもよくわからない」( $t(13)=2.59, p<.05$ )、「書き方がわからない」( $t(13)=1.88, p<.10$ )の項目の得点が減少したことが示された。

プログラムの前後で参加者に、「本を読むこと」「作文を書くこと」「読書感想文を書くこと」についての好き程度、得意度を5件法(とても好き(得意)～とても嫌い(苦手))で尋ねた。その結果を図3に示す。「作文を書くことが好き」( $t(13)=2.91, p<.05$ )、「読書感想文を書くことが好き」( $t(13)=2.54, p<.05$ )の項目の得点が有意に上昇していることが示された。

さらに、終了時のみに実施したアンケートの一部を図4, 5に示す。図4では、プログラム後に「読書感想文をうまく書けるようになった」「読書感想文を書

くことが好きになった」ことについて「とてもそう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の人数を示している。アンケート回答者 14 人中 13 人が「うまく書けるようになった」、11 人が「読書感想文を書くことが好きになった」と回答しており、本プログラムの受講によって読書感想文の作成に対する効力感が上がっている様子が見て取れる。

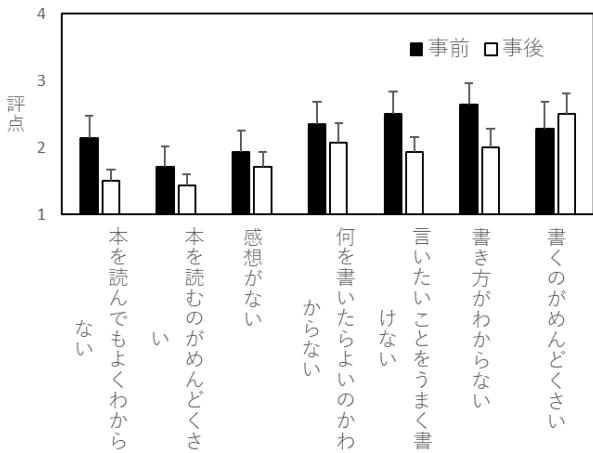


図2 読書感想文作成時の気持ちの変化

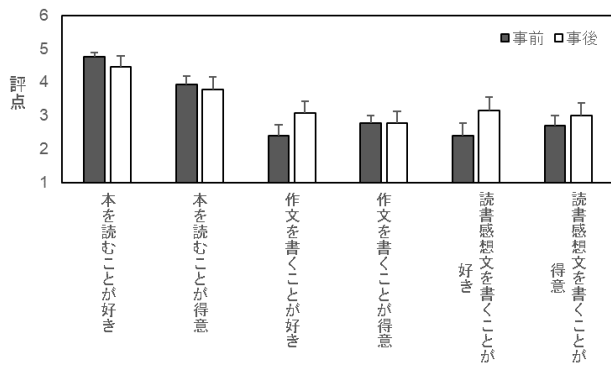


図3 読み書きに対する気持ちの変化

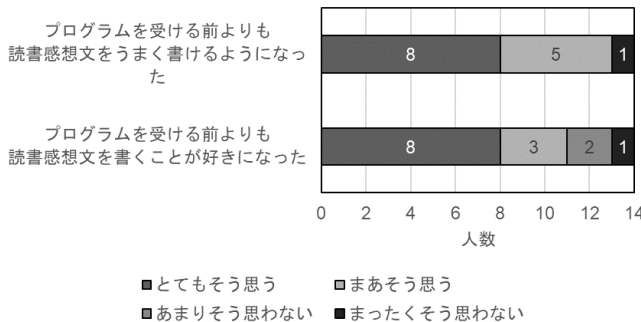


図4 プログラム後の読書感想文作成に対する効力感

図5はプログラムで紹介した手法を今後どのくらい活用したいかを尋ねた結果である。「絶対やってみる」4点、「まあやってみる」3点、「あまりやらない」2点、「まったくやらない」1点で回答を求めたところ、読み書きの代替手段として動画の視聴やタイピング入力は高い得点がついた。一方で、アイデア生成を支援するマインドマップやポストイットの今後の活用については相対的に低い得点であった。

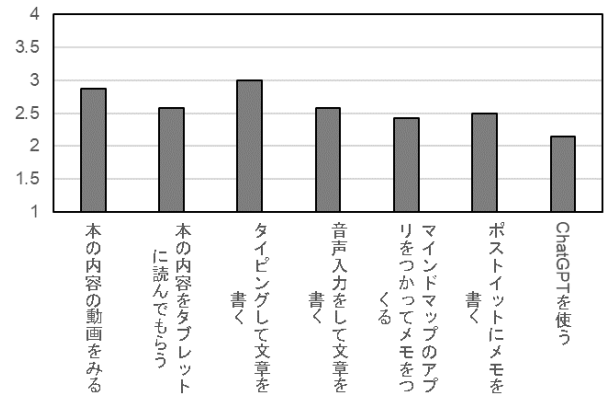


図5 今後活用したい手法・機能

プログラムを受講した中に書き障害の診断を持っている参加者が1名いたが、保護者から「プログラム後の夏休みの宿題で、初めて自分で読書感想文に取り組みました。「いいこと教えてもらったんだよな～」と言いながら、タブレット端末を使って書ききりました」との報告を得た。

本研究では、読書感想文の作成にかかわる心的活動を「読む」「思考する」「書く」のフェーズに分解し、各フェーズをICTの機能によって支援する実践を行った。「読む」「書く」のフェーズについてはICTによる代替の有効性が参加者にも認知され、読み書きに困り感を持つ学習者にも、それ以外にとっても読書感想文作成の心的障壁が小さくなった可能性がある。一方で、アイデア生成等の思考活動を支援するICTの活用方法については、生成AIの導入も視野に入れて今後実証していく必要があるだろう。

文献

[1] 文部科学省, (2012) “共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告)”, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/houkoku/1321667.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/houkoku/1321667.htm)

[2] 文部科学省, (2022), “通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について”, [https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf)